国士舘の思い出

硬式野球部ＯＢ職員として
――少年野球でブラジル国際交流――

政経学部経済学科一一期生　田所　清人

二〇一七年国士舘大学は創立一〇〇周年記念日を迎えることとなり、すでに一年を切って記念行事が動き出している。三五年前に野球部ＯＢ職員が今年リオ・オリンピック開催地ブラジル国に入り、サンパウロ市、アマゾン川流域マナウス市へも行き野球交流をしていたことをお伝えしておきたい。

この『楓原』への寄稿は、高校野球球児で野球の話になると止まらなくなる、国士舘史資料室福原一成氏から、ブラジルで野球指導をしていた事実を是非とも書いてほしいとの熱い言葉に、少しためらいがあったがお受けして、一九八二（昭和五七）年に『国士舘大学新聞』に寄稿したものを現在の思いも少し入れながら書くことにした。

私が灼熱とサンバ、そしてサッカーの国ブラジルへ行く機会を得たのは、一九八一（昭和五六）年七月上旬、当時「少年野球国際交流協会」（Ｗ・Ｂ・Ｂ・Ａ）、現在「少年軟式野球国際交流協会」（Ｉ・Ｂ・Ａ・ｂｏｙｓ）、当時代表であった江藤慎一氏（元プロ野球選手）がブラジル中央協会の紹介で柴田梵天総長を訪ねた際、近く二回目のブラジル親善少年野球使節団を訪伯するという話があり、国士舘大学もその時期に第五次ブラジル訪問団が訪伯することと合い重なり、柴田総長からその少年野球使節団のコーチとして同行するよう緊急に特命を受けた。

少年野球使節団のコーチ任務終了後は第五次ブラジル訪問団に参加することの指示を受け、初めてブラジルに行くことになった。

一九八一年七月二八日、少年野球使節団より先にサンパウロに向け、成田空港を出発した。一人旅の気楽さと不安と寂しさが入り混じっての空の旅だったが、隣り合わせた日系人男性や窓側のブラジル女性と、すぐ話が弾みサンパウロ・カンピーナスヴィラコッポス国際空港まで楽しい空の旅が出来、思いがけない旅の出会いを楽しんではいたが、私はポルトガル語が話せなかったので、隣の日系人男性が窓側の女性との通訳をして頂いて助かったことを覚えている。

長い長い空の旅も終り、いよいよブラジルである。空から初めて見るブラジルは緑色のジャングル、乾ききった赤色の土、赤色の屋根瓦でそれぞれのコントラストがとても暑さを感じさせた。そして上空から見る広大なブラジルの領土は、さすが日本領土の二三倍もある領土感を改めて深くした。ブラジルの気候は冬であったが内陸性気候のため日中はかなり温度が上がり半袖姿の人が多く見受けられた。

翌日、少年野球使節団のサンパウロ到着を迎えるため、コンゴーニャス空港に向かったがサンパウロも車が多く、ちょうど午後六時半ごろの帰宅ラッシュにかかり、普通二〇分くらいの行程を一時間三〇分もかかってしまい焦り、冷や汗をかいていた。やっとのことで空港

空港でサンパウロの少年野球チームの歓迎を受ける使節団

に着いたが、少年野球使節団一行が搭乗した飛行機が二時間遅れたため、空港で長い時間待つことになってしまいタクシーの中で冷や汗が出る焦りは何だったか、出迎えの日伯野球連盟関係者も待ちくたびれてしまっていた。しかし江藤団長を先頭に少年達が空港のゲートから顔を見せると歓声を上げて走り寄り、お互いしっかりと手を握り合っていた。

歓迎夕食会では、少年達は食欲旺盛で元気な姿を見せ旅の疲れなどどこ吹く風の様子、ホテルのロビーなどでふざけたり走り回ったりしていたが、団長と小沢コーチの消灯の声で全員あっという間に寝てしまった。元気で素直な良い少年達であった。

少年野球国際交流協会は、一九七七（昭和五二年）年に設立している。青少年野球の育成に努力し、特に少年野球は勝つことよりも精神面を重視し、チームワーク・忍耐力などを養うことを指導方針として、国内でも全国各地を巡回して野球教室を開き、心身及び技量の向上を図っている。現在は「少年軟式野球国際交流協会」となり、一九八二（昭和五七）年に笹川良一、佐川清両氏らの支援を得て、文科省の認可を受け社団法人として受け継いでいる。

今回の使節団は、一〇歳から一二歳までの熊本県出身学童を中心に編成されており、他に埼玉県から二人、東京都から一人が参加し選手は一五名であり、同行者は団長の江藤慎一氏と熊本商業高校時代の同期で九州電力株式会社野球部監督の藤井正氏、W・B・B・A専属コーチの小沢良亮氏、名誉副団長の深水慎一氏、総務局長の植田三四吉氏、母の会代表の江藤トヨ女史（江藤氏の母）そして私の総勢二二名である。

七月三一日、休む間もなく早速練習を開始した。私も少年達とは初めての野球練習である。集合した子供達の目はキラキラと澄んでいた。この時期に正しい本当の教育をし、人造りをしなければと強く感じたのを今でも覚えている。そして、このブラジル国内遠征試合の一三日間は少年達に全力でぶつかって、少しでもよい思い出となるような野球が出来ることを願った。一方、ブラジル野球関係者及び少年達は、スタンドで日本の少年達がどの様な練習をするのかじっと見つめ、日本野球を吸収しようと練習が終わるまで立ち上がる者はいなかった。当時ブラジルの少年野球では、プレーするのはほとんどが日系人であり、しかも学校単位のチームでは無く、各市町村で野球が好きな少年が集まりクラブ形式で野球チームをつくっていた。少年の部は年齢により三チームに分かれており、七歳～九歳までと、一〇歳から一二歳ま

ボンレチーノ球場での試合を終えて

試合後は必ず地元チームの選手と交歓する

で、そして一三歳から一五歳までとなっていた。

各部門で地区大会、州大会及び全伯大会への出場を目標に熱を入れてプレーしている。そしてこの大会が日系移民の親睦にも大いに役に立っている。今回は日本少年野球チームの来伯で、各地の試合球場周辺はかなり盛り上がっていた。

八月一日、カンピーナス・インダイアトゥーバ球場でのスドエステ選抜軍を皮切りに、オエステ選抜軍と合わせて二試合、サンパウロ市ボンレチーノ球場でのサンパウロＡＢＣ軍、カピタル選抜軍との二試合、マリンガ市マリンガ球場でのパラナ選抜軍と二試合、プレデンテ市球場でのプレデンテ選抜軍と二試合などと、一〇日間連日移動しながらの試合であったが、子供達は良く頑張り、敗け知らずに一〇連勝することが出来て内心ほっとしていた。

ブラジルの少年達は、日本の少年に比べ体力に恵まれているので、練習方法を改善し技術のレベルアップをはかれば、かなり強いチームが出来あがると思われた。しかし当時は、ブラジル野球界には優秀な指導者が不足しているため地方チームのレベルアップはなかなか困難のようであった。少年達は、一生懸命プレーをしているにもかかわらずポイントをついた指導がなされてないため、練習も試合も、しまりがない野球になってしまっていた。また、礼儀作法や精神面の指導もまだまだ出来ていないチームが多かった感をもちながらの転戦であった。

次の球場への移動は専用大型バスで動いたが、バスから見える、はるかかなたの地平線や広大な牧場、コーヒー農園などが長時間移動の私達を和ませ飽きさせなかった。移動中の子供達との話及び行動を見ているとおもしろい。地方遠征では子供達は民宿（ホストファミリー）した。ある少年は次の町へ移動のバスに乗る前にホストファミリーのお姉さんに別れのキスをされ、バスの中でそのことを興奮気味に話していた。また、大人顔負けのことを話す少年の部屋へ行ってみると、一人で風呂に入るのが怖いと見えて、二人で入り並んで顔だけ出していた少年もいた。ツインベッドであるのに、寂しいから片方のベッドに二人で寝ていた少年もいた。やはり幼い小学生であり、かわいいものである。子供達にとって私は教育実習の先生の様な存在であったように思えた。すっかり溶け合ってしまったので兄の様な存在でもあった気がする。

遠征中、健康を損ねた子供も若干いたが全日程を終え、サンパウロに帰ってきた時は全員元気であった。

少年野球使節団の少年達と筆者

別れる最後の夜は、全員私のところ来てサインや名刺を下さいと言ってきた。年賀状を出しますからとか、東京に行った時には必ず連絡しますから会ってくださいとか言って、全員が来てくれたので感激してしまった。願わくば将来この少年達の中から、大選手が一人でも出てほしいと思いながら別れを惜しんだ。

八月一一日いよいよ少年達と分かれる日が来た。何となく私も寂しくなった。たった十数日間であったが一年くらい野球指導をしていたような気がしていた。サンパウロ・コンゴーニャス空港で少年達最後の「コーチさようなら……」の声で私は涙がどっと溢れてしまった。

私も当時「少年軟式野球国際交流協会」の指導方針に共鳴した一人であり、大学職員として微力を尽くしたのではないかと思っている。

サンパウロ州サン・ロケ　国士舘大学協会サンパウロ分校にて

八月一四日からは、柴田梵天総長を団長とする国士舘大学ブラジル第五次訪問団とともに行動したが、訪問団最後の予定が終了した席で、柴田総長から新たな業務指示があり、私と柴田小次郎顧問は訪問団と別れることになった。アマゾン上流のマナウスから八月三〇日、サン

パウロ州サン・ロケにあるブラジル国士舘大学協会サンパウロ分校へ行き、そこに宿泊することになった。後に業務指示を確認すると、サンパウロ市とリオデジャネイロ市の中間地点に農業学校（牧場）の跡地があるので国士舘大学がその土地を購入出来たら直ぐその地に入ってもらいたいとの業務指示であった。結果的にはその土地は購入出来なかったが購入していたら、かなり長い間ブラジルに滞在することになったかもしれない。半信半疑でサン・ロケで待機していたが、私はその様に記憶している。

サンパウロ分校には広大な敷地の中に雑木林があり、また元別荘地であったためきれいに整地された芝生もあった。ユーカリの防風林が整然と並び、ゆるやかな起伏のある土地であった。

海抜八〇〇メートルもありブラジルでは気候に恵まれている地方でもある。サンパウロ中心から西へ車両で約四五分の所にある。途中の街道沿いには、民家や工場が軒並み建てられており、近い将来この分校の周辺も大変賑やかになると思われる。分校の周辺には牧場や畑や林、別荘などあり、すばらしい景色である。そのすばらしい環境の中に国士舘大学武道館を建設していた。

当時の道路状況を思い返すと、幹線道路は整備されていたが、分校の敷地に入る道路は雨が降るとドロドロになる土を固めた道であって、大雨の日はヴァルジェングランデ商店街に行くのが困難な状況であった。現在聞くところによると細い道まで舗装され環境が整っているとのこと。サンパウロ市のベットタウン化して大きく発展している住宅街になっているという（※国士舘大学武道館は完成したが現在はブラジル日本文化福祉協会へ譲渡しサン・ロケ市がスポーツ大会等に使用している）。

以来、私はこの分校に三八日間滞在し、朝は囀る小鳥の鳴き声で目を覚まし、夜はユーカリの葉が擦れるささやきで寝るという生活をしていた。しかし、あまりにも静かすぎて犬の遠吠えが聞こえる妙に不気味な夜もあった。ヘビも居るという話を聞いていたが、季節が冬であったため残念ながらなかなかお目にかかれず、管理使用人が敷地内で野焼きをしていた時に約一メートルのガラガラヘビ（カスカベール）を見た。初対面なのでうれしいようなこわいような。その後も校内を歩いている時に、二回緑色のヘビ（ジャラクスー）と対面、また池の淵にいた黒いヘビなど彼らとも忘れずに交流した。

この間私は、図らずも近くの町ヴァルジェングランデにある日本語学校の少年野球チームを指導することになった。この日本語学校には先に剣道指導で大学職員の

サン・ロケ国士舘大学協会サンパウロ分校にて
（左から須藤磐サンパウロ分校職員、柴田小次郎顧問（当時）と筆者）

上地康夫氏が入っており、稽古に厳しくも愛がある指導で、全生徒さんの人気先生になっていた。

この日本語学校の少年野球チームで一か月間、一三歳から一五歳を指導することになった。この選手達には礼儀作法や協調性（チームワーク）、野球をプレーするにあたっての精神面などについて週三回の割合で指導した。

基本練習を徹底的に行うことにより、このチームの選手達の技術は、始めて見た時とはずいぶん違って、チームのレベルは見る見るアップし、ご父母から感謝された。特に私が最初に選手に伝えたことは、グランドの出入りは常にグランドに対して感謝の気持ちをもって、一礼をすることを実行させたが、これはご父母から喜ばれた。このようなことは日本ではあたりまえであるが、ブラジルの三世・四世では理解できない点もいろいろあったろうと思われる。しかし、このような些細なことでもヴァルジェングランデから周辺の町及び他チームへ伝わってくれればと願った。

九月五日、この少年達と別れるときが来てしまった。マナウス総領事から柴田梵天総長に、野球指導員の派遣依頼が届いたからである。

ヴァルジェングランデの少年達と一〇月五日最後の練

習終了後、ブラジル国旗に全員が署名して心を込めた記念としてプレゼントしてくれた。主将の伊藤君が「田所先生から野球についての心構えや礼儀作法、基本技術を教えていただき本当にありがとうございました。先生のことは忘れません。是非またヴァルジェングランデに来てください」と挨拶されたとき、また目頭が熱くなってしまった。

マナウスアマゾンにて

一〇月九日、再びマナウスへ飛んだ。

マナウスアマゾンに日系人が地域に移住したのが一九二九年（昭和四年）今年で八七年になる。現在は人口一九〇万人。日本企業の工場も数多く進出。ホンダ、ヤマハ、パナソニック、ソニーの会社その他が進出している。当時、好景気を支えたゴムの木を栽培しようと試みるも、既に土地はやせ細っていたと聞く。土地は石ころや砂だらけ。作物が育たなかった。畑への水汲みが大変で遠く離れたところから運んでいたとも聞いている。

一九八一年一〇月その地で、第一回西部アマゾン野球大会が開催されることになった。同年八月に第五次訪問団が訪れて以来、親密になった本学との関係から、マナ

コロニアチームは大人もチームメイト、前列中央筆者

ウス総領事も本学に要請してきたものと思われる。

この大会への参加チームは、ベレンチーム、ポルトベーリョA・Bチーム、マナウス対岸のカカオペレチーム、マナウスコロニアチーム、マナウスA・Bチームおよび商社選抜チームの計八チームである。大森淳正総領事も出席し、始球式をやるほどの熱の入れようであった。一〇日・一一日の両日にわたる激戦の結果、第一回の優勝を飾ったのはパラ州のベレンチームであった。私は両日にわたり審判及び進行係を務めたが、終始和やかな雰囲気の中で野球大会を無事終了することが出来た。

大会の翌日から大森総領事と日伯文化協会会長寺野氏から各チームの指導を依頼され、ポルトベーリョチーム、マナウスの対岸にあるネグロ川（アマゾン支流）を四五分かけて渡河した所のカカオペレチーム、マナウスコロニアチームおよびマナウスBチームの四チームを約一週間にわたり指導した。

どのチームも私の指導事項を真剣に聞いて頂いて一生懸命プレーしてくれた。暑い中の三・四時間の指導であったが基本練習は身に付いたと信じている。どのチームも一日だけの指導であったが別れるときは、お互いに再会を約束していつまでも手を振っていた。

ブラジルの休暇

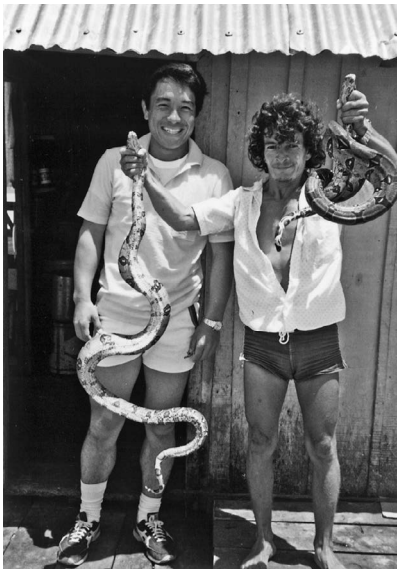
三ヶ月のブラジル滞在中に、私が唯一ゆっくりできたのはイグアス瀑布への観光とマナウスにおけるネグロ川での川遊びであった。

イグアス瀑布観光はヴァルジェングランデ日本語学校で剣道指導していた上地康夫氏との珍道中であった。細かいことは書かないことにするが今思い出すと楽しいスリリングな数日であった。イグアス瀑布はアルゼンチン国とパラグアイ国が接する国境にあり、直線距離にして約四㎞、ゆるやかな曲線を描いて瀑布をつくる。落差約八〇メートル、三百余の滝が一大半円形劇場を造る。実に壮観であり水量は北米のナイアガラ瀑布や南アフリカのビクトリア瀑布をもはるかにしのぐと言われていたが、まさしくその通りであった。特に「悪魔の喉」と言われている一番奥にある滝は、しばらく我を忘れさすような魔力を持っている。

マナウスでの川遊びは、ネグロ川（黒色）とソリモインス川（茶褐色）がY字に合流する場所にあるが、水温と流れの速さが違うため下流二五キロメートルくらいまで、混じり合わないで平行する二条の流れを小舟に乗っ

イグアスの滝、背後が悪魔の喉

ネグロ川（黒色）とソリモインス川（茶褐色）の合流地点


マナウス川遊びの船頭と筆者（左）

て見て回った。自然が描く見事なそして不思議な一大キャンバスであった。その合流地点には淡水イルカが飛び跳ねておりこれにはびっくりしたが、五〇センチもあるナマズが釣れた時にまたびっくり。次は少し上流の奥へ行ってみるとピラニアが釣れ、ピラニア収穫は二匹で、肩を落として帰ってきた。ピラニアはマナウスでは美味しいと言われ、日本ではまずいと聞いていたので食べてみたが、私の味覚が鈍感なのかもしれないが、とても美味しかったことを皆さんに伝えておきたい。

ブラジル滞在中のことをいま静かに振り返って見ると、懐かしい想い出が走馬灯のように胸中をよぎる。少年達との別れに幾度か流した熱い涙は、たとえ言葉が通じなくとも真心は通じるものという貴重な体験を得た。日本に居るときに抱いていたブラジルのイメージは現地に行って全く新しく塗り変えられてしまった。人も景色もスケールが大きく、全てを抱擁し尽す。まさに世界一の大河を抱く大国ブラジルである。

最後に今回の寄稿に関し、故柴田梵天先生にブラジル行きを命じられ、三か月の体験・経験を与えて頂いたことに心から感謝申し上げたい。先生にこの声がもう一度届くことを願う。また冒頭に申し上げた国士舘史資料室の福原一成氏に寄稿を薦められ、永久に『楓原』に文字として残すことが出来たことを御礼申し上げ、国士舘大学硬式野球部ＯＢの一人がブラジルの地に野球の苗木を植えられたことを誇りに思うとともに、ブラジル人から大選手が出てくることを期待する。